

『まことの光と証し人』

ヨハネの福音書 1 章 6～13 節

1. 証し人ヨハネ

本日の6節に「**神から遣わされた一人の人が現れた。その名はヨハネであった。**」と、一人の人間のことが語られています。ここで私たちの目は、この世のこと、生きた具体的現実的な人間のことへと向けられています。このヨハネは、一般に「バプテスマのヨハネ」と呼ばれている人です。イエス様が活動を始める前に、バプテスマのヨハネが現れ、イエス様のための備えをしたということは、四つの福音書に共通して語られています。しかし、そのヨハネがどのようにイエス様のための備えをしたかは、ヨハネの福音書と他の三つの福音書では違っています。他の三つの福音書では、ヨハネは人々の罪を指摘し、悔い改めを求め、悔い改めの印としての洗礼を授けました。自分たちが罪人であることを人々に意識させ、悔い改めて神に立ち帰ることを促すことによって、救い主イエス・キリストを迎える準備をしたのです。ヨハネの福音書におけるヨハネはそういうことはしていません。

この福音書においてヨハネがしたことは何か。7節に「**この人は証しのために来た。光について証しするためであり、彼によってすべての人が信じるためであった。**」とあります。バプテスマのヨハネは、「証し」をするために神から遣わされた人なのです。「証し」とは、証言です。見たり聞いたり体験して知っていることを、「こうでした」と人に伝え、それを聞いた人々が「ああそうなんだ」と知ようになる、それが「証し」です。ヨハネは、「**光について証しするため**」に神によって遣わされました。その「光」とは、「**初めにことばがあった**」とあり、「**この方にはいのちがあった。このいのちは人の光であった。**」と言われているその「光」です。5節に「**光は闇の中に輝いている。闇はこれに打ち勝たなかった。**」と言われているその「光」です。そして9節では「**すべての人を照らすそのまことの光が、世に来ようとしていた。**」と言われています。初めにあった「ことば」、自らが神であり、「いのち」であり、「光」であるその方がこの世に来て、まことの「光」として全ての人を照らす、それは主イエス・キリストのことです。その「光」であるイエス様について証しをするためにヨハネは現れたのです。バプテスマのヨハネは、イエス様こそがまことの「光」であることを全ての人が知り、信じるようになるために「証し」をすることによって、救い主イエス・キリストの働きのための備えをしたのです。

2. 光についての証し人

8節には「**彼は光ではなかった。ただ光について証しするために来たのである。**」とあります。ヨハネが証しするために神から遣わされたことが繰り返して語られているわけですが、「**彼は光ではなかった**」と言われていることがこの8節のポイントです。「光」について「証し」をしたヨハネは、「光」ではないのです。まことの「光」は、彼の後に現れるイエス様なのであって、彼はその「**まことの光**」へと人々の目を向けさせ、人々がその「光」を信じるようになるために「証し」をしたのです。このことは、19節以下に詳しく語られていきます。そこでヨハネは、「**私はキリストではありません**」と言っています。「キリスト」とは、神が遣わして下さる救い主のことです。自分が救い主なのではない、とヨハネははっきり言ったのです。

そして、それではあなたは何なのか、と問われて、彼はイザヤ書の言葉を引用して「**私は、預言者イザヤが言った、『主の道をまっすぐにせよ、と荒野で叫ぶ者の声』です。**」と答えました。「まことの光」である救い主が来られることを告げ、その方を迎えるために備えをせよと叫ぶ声、それが私だ、ということです。また15節には、ヨハネが「**私の後に来られる方は、私にまさる方です。私より先におられたからです**」と私が言ったのは、この方のことです。」と語ったことが記されています。自分が「光」なのではなく、自分の後から「まことの光」である方が現れる、その方を指し示し、人々の心をその方へと向けるために私は「証し人」として生きている、著者は、バプテスマのヨハネがそのような自覚をはっきりと持っていることを語っています。

バプテスマのヨハネが、イエス様と自分との関係を語っている箇所はこの後にもいくつかありますが、代表的なの

は 3 章 28～30 節です。そこにおいてヨハネは『私はキリストではありません。むしろ、その方の前に私は遣わされたのです』と私が言ったことは、あなたがた自身が証ししてくれます。花嫁を迎えるのは花婿です。そばに立って花婿が語ることに耳を傾けている友人は、花婿の声を聞いて大いに喜びます。ですから、私もその喜びに満ちあふれています。あの方は盛んになり、私は衰えなければなりません。』と言っています。ヨハネの福音書がバプテスマのヨハネのことをこのように花婿の介添人として、衰えていくべき者として描いていること理由は、一つには、当時、ヨハネを救い主だと信じていた人々がいたからだと思われまゝ。彼らはヨハネが捕えられ、殺された後も、その教えを守っていたのです。その人々の間に、ヨハネこそ神が約束して下さっていた救い主だった、という信仰が生まれていったようです。ヨハネの福音書は、そういう人たちの存在を意識しつつ、ヨハネではなくて主イエス・キリストこそが救い主なのであって、ヨハネは救い主イエスの「証し」をした人だ、ということを示すために語っています。

しかしヨハネは、救い主ではない、イエス様こそが救い主だ、と語ろうとしているということだけでは、この福音書におけるバプテスマのヨハネの位置づけを十分に説明することはできないのです。なぜならこの福音書において、バプテスマのヨハネは、他の三つの福音書以上にしばしば登場しており、しかも他の福音書におけるよりも大事な役割を担っているからです。

イエス様ご自身が、バプテスマのヨハネのことを 5 章 33～35 節で「あなたがたはヨハネのところに人を遣わしました。そして彼は真理について証しました。わたしは人からの証しを受けませんが、あなたがたが救われるために、これらのことを言うのです。ヨハネは燃えて輝くともしびであり、あなたがたはしばらくの間、その光の中で大いに喜ぼうとしました。」と語っています。「彼は真理について証しました」とイエス様は言っています。その「真理」とは、イエス様のことです。そしてそのヨハネは「燃えて輝くともしびであり」とも言っています。つまりヨハネはまさに「光」について「証し」をし、人々が彼の「証し」によって輝く「光」に照らされたのだ、と言っているのです。ヨハネの福音書は、ヨハネが、「まことの光」であり、「真理」であり、「いのち」である「光」の「証し」をしたことを積極的に評価しているのです。ヨハネ自身は救い主ではない、ということによってヨハネの評価を下げようとしているのではなくて、むしろ「証し」人であるヨハネを高く評価し、信仰者の模範としているのです。

3. 証しの書

ヨハネの福音書を書いた人のことが語られている文章が、21 章にあります。21 章 24 節に、この福音書を書いた人のことが感謝をもって思い起こされ、「これらのことについて証しし、これらのことを書いた者は、その弟子である。私たちは、彼の証しが真実であることを知っている。」と語られています。この福音書を書いた人の「証し」が真実であることを知っている人たちの群れの中で、21 章は書かれたのです。そしてこの 24 節では、ヨハネの福音書を書いたのは「その弟子」だと言われています。「その弟子」とは、その前の 20 節に出て来る「イエスが愛された弟子」です。この弟子は、最後の晩餐の時から登場しており、イエス様の受難と復活の場面に何度も出てきます。この「イエスが愛された弟子」がヨハネの福音書を書いたとされているのです。この弟子の名前はこの福音書の中に全く語られていません。それはゼベダイの子であり、ヤコブの兄弟だったヨハネだと言い伝えられてきたので、この福音書は、ヨハネの福音書と呼ばれるようになったのです。ですからこれが「ヨハネの」福音書であるという明確な根拠はないわけですが、21 章 24 節に「これらのことについて証しし」とありました。この福音書を書いた弟子は、イエス様についての「証し」をしたのです。この福音書はその全体が「証し」の書なのです。その「証し」を最初にしたのは、「神から遣わされた一人の人が現れた。その名はヨハネであつた。この人は証しのために来た。」と語られているヨハネです。このヨハネは勿論バプテスマのヨハネであって、主イエスの愛しておられた弟子とは別の人ですが、しかしこの福音書が「証し」の書であるとすれば、バプテスマのヨハネもまたその「証し」を語った人の一人だと言えます。この福音書はバプテスマのヨハネによる「証し」の書でもあるのです。「イエスが愛された弟子」がヤコブの兄弟ヨハネだとすれば、この福音書は複数のヨハネによる「証し」の書だということになります。あるいは、この福音書において「証し」をしている人で名前が知れているのはバプテスマのヨハネだけであることから、もう一人の「証し」

人である「**イエスが愛された弟子**」はヨハネであるという言い伝えが生まれたのかもしれませんが。大事なのは、この福音書が**イエス様**についての「**証し**」の書であり、その「**証し**」の先駆者がバプテスマのヨハネなのだ、ということです。そして**イエス様**はこの福音書の 15 章 27 節で、弟子たちに「**あなたがたも証します。初めからわたしと一緒にいたからです。**」と言っておられます。つまり、**イエス様**に従っていく弟子たち、信仰者たちも、**イエス様**のことを「**証し**」する人となるのです。その「**証し**」の先駆者であるバプテスマのヨハネは、またこの福音書を書いた「**イエスが愛された弟子**」は、「**証し人**」として生きた信仰の先達、私たちがその後に従って歩み、見倣うべき信仰の模範なのです。

イエス様こそ「**まことの光**」であることを「**証し**」することがこの福音書の書かれた目的であることは、以前に読んだ 20 章 31 節に語られていたことと繋がります。そこには「**これらのことが書かれたのは、イエスが神の子キリストであることを、あなたがたが信じるためであり、また信じて、イエスの名によっていのちを得るためである。**」とありました。「**まことの光**」である**イエス様**の「**証し**」をし、それによって人々が**イエス様**を救い主であると信じるようになり、**イエス様**によるまことの命を受ける、そのためにこの福音書は書かれたのです。バプテスマのヨハネもまた、そのための「**証し**」に生きたのです。

このようにヨハネの福音書は「**証し**」の書です。しかしなぜ「**証し**」が必要なのでしょう。「**証し**」とはそもそもどのようなものなのでしょう。先程、「**証し**」とは「**証言**」と言いました。「**証言**」とは、辞書ですと「ある事柄が事実であると相手に伝える為に、体験したことをはっきりと話すこと」という意味と「法廷などで、証人が事件についての質問について受け答えすること」という意味となっています。例えば何かの事件を目撃した人が、目撃者として「**証言**」をします。それによって、そこにいなかった人、見ていなかった人も、こういうことが起ったのだ、と知るようになるのです。「**証言**」というのはそのように、そのことを知らない人、見ていない人に、知っている人、見た人が語るものです。そこで問われるのは、その「**証言**」を信じるか信じないか、です。事件の捜査で言えば、ある目撃証言が得られたとして、それが起ったことを正確に伝えているのかどうか、色々な物的証拠から、また他の人の証言と突き合わせて検討して、事件の全貌を掴んでいくのです。「**証言**」というのはそのように、直ちに真実として受け入れられるものではありません。それを信じるか否かの判断が求められるのです。そういう意味で「**証言**」と、客観的な報告とは違います。「**証言**」は、それを信じ、受け入れるかどうかの決断を聞く者に迫るのです。

4. 信仰の決断

ヨハネの福音書が「**証し**」の書であり、**イエス様**のことを「**証し**」しているということの意味もそこにあります。**イエス様**こそ、初めにあった「**ことば**」、ご自身が**神**である「**ことば**」であり、その「**ことば**」によって全てのものは造られた。この「**ことば**」にこそ「**いのち**」があり、人間の「**光**」がある。その「**光**」が世に来て、全ての人を照らして下さる「**光**」、つまり救い主となって下さった。それが主**イエス・キリスト**です。とこの福音書は「**証し**」しています。しかしそのことは、客観的な報告として、誰が読んでも「**ああそうだ**」と分かり、納得できるようなことではないのです。その「**証し**」を信じて受け入れるか、信じないかの決断が私たちに求められているのです。

イエス様の生涯とは、まさにそのような歩みだったのだということを、10、11 節に「**この方はもともと世におられ、世はこの方によって造られたのに、世はこの方を知らなかった。この方はご自分のところに來られたのに、ご自分の民はこの方を受け入れなかった。**」と語っています。3 節に「**すべてのものは、この方によって造られた。造られたもので、この方によらずにできたものは一つもなかった。**」とあり、つまりこの世界の全てのものの造り主でもある「**ことば**」が、肉をとり、人となってこの世に來られたのです。それは 9 節で「**すべての人を照らすそのまことの光が、世に來ようとしていた。**」と言われていたのと同じことであり、この後の 14 節に「**ことばは人となって、私たちの間に住まわれた。**」とされていることです。

「**ことば**」は、**イエス**という一人の人間となって、この世に、私たちのもとに來て下さいました。**イエス様**は、ご自分が創造し、命を与えたご自分の民のところに來られたのです。しかしこの世は、その**イエス様**を認めず、受け入れ

なかった、イエス様を拒み、十字架につけて殺してしまったのです。つまりイエス様がまことの神であり救い主であることが分からなかったのです。イエス様を十字架につけたのは当時のユダヤの人々ですが、私たちも今、イエス様こそ「まことの光」であり、救い主であられるという「証し」を聞いて、それを信じない、受け入れないとすれば、それは私たちもイエス様を十字架につけた人々と同じだ、ということです。イエス様による救いは、当時も今も、そこに救いがあることが誰にでもはっきりと分かる、というものではないのです。つまりそれは「証し」によって、「証言」によって示されているのです。私たちはその「証し」を聞いて、それを信じて受け入れるか、信じないで拒むかという決断を求められるのです。ヨハネの福音書が、「証し」という仕方でイエス様による救いを語り、宣べ伝えていることにはそういう意味があります。このことは実は他の福音書においても同じです。イエス様による救いの知らせ、つまり福音は、「証し」という仕方でしか語られ得ないのです。キリストによる救いを、誰が聞いても理解でき、納得できる客観的な報告として語ることはできません。福音を伝える言葉は常に「証し」です。それを聞く者は、イエス様を救い主として、「まことの光」として信じ受け入れて、イエス様に従い共に生きる者となるか、それともそれを受け入れず、イエス様に従うことを拒み、自分を主人として生き続けるか、という信仰の決断を迫られるのです。

5. 神の子となる特権

イエス様についての「証し」を聞いて、イエス様を信じ受け入れる決断をする者に約束されている恵みが 12 節に「**しかし、この方を受け入れた人々、すなわち、その名を信じた人々には、神の子どもとなる特権をお与えになった。**」と語られています。初めにあった「ことば」であり、まことの神であり、人となって私たちの救い主としてこの世に来て下さったイエス様を受け入れ、その御名を信じる者に、イエス様は「**神の子どもとなる特権**」を与えて下さるのです。「特権」と訳されていますが、共同訳では「資格」となっています。これは私たちが勉強して、あるいは試験を受けて取る資格とは全く違います。資格と訳されている言葉は「権威」という意味です。「権威」は、獲得するものではなくて与えられるものです。「権力」は自分の力で得ることができかもしれませんが、「権威」はどんなに力があっても自分で得ることはできません。それは他から与えられ、認められるものです。神の子となることも、私たちが自分の力でその資格を得ることによって実現するものではありません。神が子として認め、受け入れて下さるという恵みによって与えられるのです。生まれつきの私たちは、この世界と私たちを造り、生かして下さっている神に逆らい、神を神として認めずに拒んでいる罪人であって、神の子となることなど到底出来ない者です。その私たちをご自分の子としようとして、神はそのひとり子である主イエス・キリストを人間としてこの世に遣わし、その十字架の死によって私たちの罪を赦して下さいました。神が遣わして下さった神の子主イエス・キリストを信じて受け入れ、イエス様と共に生きるなら、神はその人をご自分の子として受け入れて下さるのです。それは 13 節に語られている、「**この人々は、血によってではなく、肉の望むところでも人の意志によってでもなく、ただ、神によって生まれたのである。**」ということが実現することです。神が私たちを神の子として新しく生まれ変わらせて下さる、と言ってもよいでしょう。イエス様を自分の救い主と信じて洗礼を受けることにおいて、神は私たちをご自分の子として生まれ変わらせて下さるのです。

イエス様についての証しを聞いて、イエス様を神の「ことば」、救い主、「まことの光」として信じ、受け入れることによって私たちは、神の子として新しく生かされる、という救いを与えられます。しかしそこには同時に、イエス様を受け入れず、信じない、ということも起り得ます。この世を生きている私たちは、自分がそのどちらの道を選び、歩むのかを問われています。「証し」の書であるヨハネの福音書は、そのことを私たちに問い掛けており、その最初の「証し」を語っているのがバプテスマのヨハネなのです。ヨハネから始まったイエス様についての「証し」を信じて受け入れ、世に来てすべての者を照らして下さるまことの光であるイエス様によって照らされるなら、私たちも神の子とされて生きることができます。その信仰の歩みにおいて私たちも、ヨハネやこの福音書を書いた人の後に続いて、「まことの光」である救い主イエス・キリストの「証し」人として、それぞれの生活の場へと、神によって遣わされていくのです。